

弘南寮の誕生の秘話 （弘南寮 HP 平成 21 年 7 月 2 日掲載）

岡田 岩（22 造船）

昭和二十年八月十五日で戦争が終わったとは言うものの、国内は長い戦争で全ての機能が混乱を来していた。学校も再開の見通しが立たなかったのか、何回問い合わせても、「暫らく待て」という返事だった。暫らく経ったある日の事、学校から再開の連絡が有った。早速、横浜に行く事にしたが、行く先の当ても無かったので田中一郎君にお願いして、荷物は澤渡の田中君の家に送ることにした。

そして田中君の家に一週間程泊めて頂き、その間毎日のように下宿を探して歩いた。この時田中君のお母さんには、大変ご迷惑をお掛けしたが、良く面倒を見て下さって、今でも大変感謝して居る。お蔭でやっと蒔田に下宿を見つける事が出来た。しかし食事の方は断られたが、当時の状況では仕方なかった。このお家は田中雪子さんといって、奥さんと娘さんの二人住まいで、当時は進駐軍の兵隊がジープで、町の中を走り廻って居た頃だったので、不用心だからと私は用心棒の嫌な役割だった様である。私は之から毎日外食しなければならなくなり、毎日の三度の食事は大変だった。何時も学校の近くの食堂で食事をしていましたが、時には友達と伊勢佐木町まで食べに行ったが、この頃は未だ伊勢佐木町の焼け跡には米軍の小型飛行場もあり、小型機が離着陸していた。

この頃生徒の中には下宿が無くて、学校に出られない生徒が未だ大勢居るらしかった。或日の事、生徒課の渾大坊先生に会いに行った。先生は岡山県児島のご出身で、児島と言えば戦前から学生服の生産は日本一だったとか、先生のお家では父親の代に家業の織物工場が倒産したらしく、今は誰も児島に住んで居ないそうで、私も田舎に帰った時に、祖父に深大坊さんという家の事を聞いたら。祖父は「昔は大きな織物会社だった」と、覚えていて教えてくれた。先生は入学当初から、私の岡山弁を聞いて覚えてくれたらしく、良く声を掛けて下さって居たので、学校では友達が下宿不足で困って居るので、何とかならないものかと、先生に直接お願いした。すると先生は学校でも、いろいろ手を打って居るので、いま少し待つ様にとの事でした。

暫らくしてから先生に御合いましたら、金沢文庫に元海軍の軍需工場の、女子挺身隊の宿舎がある、近い内にこれを借りる事が出来そうだという事でした。

この宿舎は二階建か二棟あって、一棟は戦災者の家族寮になって居り、残りの一棟が第四寮となったのである。

私達は昭和二十一年になって、漸く此处に入る事が出来た。これで我々は食事と住居については、最低限保障される事になった。この寮は寮生の自治寮として、部屋割りを決めた。寮生は全部で四十人位だったと思う。私は二階の一番端の四畳半に一人で住む事になった。しかし寮では昼間は、みんな学校に行って留守になるので、小学校を退職されていた、元小学校の校長先生を舎監にお願いした。また賄い楊と食堂は別棟となっていたので、此处に賄い夫婦を雇って住んでもらい、賄い等一切をお願いした。この夫婦は飯沼さんと言う人で、空き地に芋等を植えて、腹を空かしている寮生の為に尽くして下さった。

この頃は米の配給等はどうだったのか、あまり覚えて居ないが、食欲旺盛な若者を多く抱えて、賄いの人は食料や燃料を集めるのに、大変苦勞をした事と思う。我々寮生も旧軍需工場の空き地から、炊事用の燃料を担いで来た記憶がある。之で寮生は安心して学校に行ける様になった。寮生は各科の生徒が混在して生活するので、造船以外の生徒と付き合う様になり、今迄に無い楽しい経験を積む事が出来た。そして第四寮は「弘南寮」と命名し、国広君の作詞、石井君の作曲で寮歌が生まれ、寮生はこれから寮歌を口ずさむ様になる。之から毎日金沢文庫から弘明寺まで、「湘南電車・・・今の京浜急行・・・での通学となったか、この頃は電車の整備かうまく出来なかったのか、よく故障をしていたので、我々の間ではこの電車を「遭難電車」と呼ぶ者も居た。

此処金沢文庫は横須賀に近いので、日本海軍の水兵に代わって、終戦後は米軍の水兵を多く見かける様になった。寮生の中には横須賀の米国海軍のキャンプヘアルバイトに出かける者も居て、時には珍しいお菓子やチョコレート等を、手に入れて来て寮生に配って呉れた事もあった。当時の金沢文庫は未だ民家は少なく、農家では陸稲を植えたり、薩摩芋を作ったりしていた。また山に行くと山芋があったが、之は根が深いので、掘るには侍殊な道具が無いと掘れないので、掘った事はなかった。金沢文庫の海岸は美しい砂浜で、海水浴も出来たらしいが、泳いだ事はなかった。農家の人は海へ行って海苔を採って来て、これを庭先に干していたが、当時は貴重な収入源だったかもしれない。

「弘甫寮」に入ってから寮の近くの、松尾君の家へ良く出かけて行った。松尾君のご両親は京都のご出身で。関西の話を良くなさった。あの食料難の時代でも松尾君のお父さんが、海軍に物資を納めて居たとかで、よく珍しい物をご馳走になる等、松尾君のお母さんには大変ご迷惑をかけた。

そして一年数ヶ月が過ぎて私達三年生は、昭和二十二年三月卒業と同時に、この寮に別れを告げたのである。